

## 介護福祉士教育における 学生の主体的学習能力育成への教育実践報告

大 林 博 美  
三輪木 君子  
(専攻科福祉専攻・非常勤講師)

### I はじめに

介護福祉士とは、ヒューマンサービスの担い手であり、要介護者の生命と生活に責任をもつ仕事である。したがって単に身体機能の欠落部分を補完する即戦力や単純労働ではなく、「なぜ、介護が必要な状態になるのか、どういうことを問題解決というのか、疾病や障害だけでなく対象者を取巻く社会環境や自然環境との関係の中から問題の所在を探りだし、介護を通して思考を深化させ、問題の本質が見極められる思考を身につけること」が重要になる。

法律改正（2008年12月）では、介護福祉士の行う「介護」に関する定義規定について「入浴、排泄、食事その他の介護」から「心身の状況に応じた介護」に改められた。介護行為のその場その場での判断ではなく、生活を支える視点やその人の思いや感情といった精神状態についての個別性の理解、あるいは援助技術を統合した判断が求められている。

すなわち、その人の尊厳を守り、その時その場の状況を的確に判断し、しかもその人に合ったその人らしい生活支援を行うために介護職に求められる能力は、単なるマニュアル的な知識、技術を適用する能力ではなく、主体的学習能力から生まれる創造

的な問題解決能力であるともいえる。

既に看護教育では、主体的に学ぶ力の育成の必要性から、学習者参画型授業（1994林）に注目し、その一つの方法としてラベルワークが取り入れられ、多くの実践報告がされている（2004林・金城）。『ラベルワークとは、人間性の知的活動、とりわけ知識の発信・交流および（知的生産のための）図解思考の道具（媒体）としてラベルを用いる理論と技術の体系である（2004林）。』と定義され、看護教育では、「看護の知の探求法（看護ラベルワーク）」として、実習教育に応用されている（2004金城）。なかでも佐藤は、ラベルワークは創造的な、主体的学びを作り、参画する主体としての自己の成長をもたらすとして、看護教育とりわけ臨床看護実習においてその教育効果を実証している（2003佐藤）。

そこで、筆者たちは、介護系の授業科目「介護技術」・「実習指導」・「介護概論」の演習において学生が主体的に取り組む学習方法としてラベルワークを取り入れた実践の報告を行う。また、学生の創造性について、1つの指標として創造的態度診断（CBテスト：Creative Behavior Test）（2003高橋）を用いてみたので、その結果の報告をする。

## II 研究の目的

介護教育における学生の主体的学習能力育成への教育方法を探る

## III 研究方法

### 1. 対象者

専攻科福祉専攻 16名  
平均年齢 20.8歳

### 2. 研究期間

平成20年4月～平成21年1月

### 3. 方法

1) 介護系授業科目「介護技術」・「実習指導」・「介護概論」の演習・実習のまとめにラベルワークを取り入れ実施する。

①介護技術「身だしなみを整える」

平成20年5月9日

②実習指導「居宅介護実習の振り返り」

平成20年5月9日～27日

③実習指導「第一段階実習の振り返り」

平成20年6月5日～20日

④介護概論「福祉情報展の反省・まとめ」

平成20年9月17日～24日

2) 創造的態定の測定：創造的態度診断  
(CBテスト)

一年間における学生の創造的態定の変化をみる。創造的態度診断 (CBテスト：Creative Behavior Test) (2003高橋)は、創造的態定を創造的思考のタイプすなわち発散思考 (問題解決のアイデアを出す) と収束思考 (問題解決に向けてまとめる), 創造意欲 (新しいことに挑戦することが好き), 創造パワーの3因子からなる質問項目30問を得点化し, 自分の創造的態定がどのレベ

ルにあるか診断するものである。

①創造的態定診断 (CBテスト) 事前調査  
平成20年4月25日

②創造的態定診断 (CBテスト) 事後調査  
平成21年1月23日

③倫理的配慮

対象者には口頭で研究の目的, 方法およびプライバシーの保護について説明し, 同意を得て, 創造的態定診断 (CBテスト) を行なう。

### 4. 研究内容

1) 介護技術「身だしなみを整える」演習

テーマは「高齢者にとって身だしなみを整えるとは」とした。授業の展開方法は, ラベルワーク方法を用いたグループワーク (1G:5～6人) 4Gで行い, ラベル数は1G20～24枚であった。

具体的な展開方法は, ラベルワークを取り入れ以下の手順で行った。

i) ラベルを書く。(複写式ラベル【参画文化研究会】にテーマにそって, 一人4枚, 30～50字の文章で書く。)

ii) 図で考える。

- ・ラベルを読み合わせ, 意味内容を確認し, 似ている内容のラベルを小皿に載せる。
- ・小皿に載せたラベルが共通に言わんとしていることを検討し, 看板を付ける。
- ・小皿と小皿の看板の意味内容が似ているもの, 共通性のあるものを中皿に載せさらに看板をつける。
- ・取り皿の空間配置をし, 関係線をつける。
- ・できあがった図解を見ながら, 全体

として何を言わんとしているか、テーマに対する答えを導き出し、タイトルをつける。

- ・遣いに磨きをかける。キーワードやマジックインキでイラストを入れたり、飾りをつけたりしてわかりやすく、美しく仕上げる。

iii) 発表をする。

【なぜ介護技術の授業の中に「身だしなみの意義」のラベルワークを取り入れたか】

これまでの介護技術教育では、講義、デモンストレーション、演習といった方法が一般的である。この方法は限られた時間の中で、多くの内容を効率よく教えるという点では効果的である。しかし、一方的に知識・技術を伝達することになり、学生は受身的で、教えられた知識に頼り、その場の状況に応じて、自ら考えて主体的に行動する姿勢や創造的な問題解決能力は育ちにくい。

身だしなみを整えるという行為は、人が自立・自律して生活していく上での基本的行為であり、成長・発達する過程で、学習し獲得する身体技法である。学生自身も毎日習慣的に行っている行為であり、特におしゃれは年頃の学生にとって非常に興味や関心の高い話題である。

そこで、今回は講義・演習といったこれまでの授業の方法ではなく、学生が主体的に取り組むことができる身近な問題をテーマにラベルワークを用いた学習法を試みた。授業では「身だしなみを整えることの意義」について、日ごろの各学生自身の体験を掘り起こし、グループメンバーとの話し合いを通して、体験の意味を明らかにしつつ構造化し、知識の共有化を図ることを目的とした。

## 2) 実習指導「居宅介護実習の振り返り」

テーマは、「居宅介護実習の気づきとは」とした。授業の展開方法は、ラベルワーク方法を用いたグループワーク（1G：2～3人）8Gでおこなった。ラベル数は1G22～33枚であった。具体的な展開方法は、介護技術「身だしなみを整える」と同じ方法である。

【なぜ実習指導の授業の「居宅介護実習の振り返り」にラベルワークを取り入れたか】

これまでの介護福祉士の実習中や実習後の指導では、カンファレンス、反省会を行っていた。カンファレンスや反省会では、学生と実習指導者と教員の三者で行い、学生が順番に個々の体験や感想を発言し、指導者や教員からアドバイスを受けるといった方法をとっていた。このような方法は、限られた時間の中で、個々の体験を聞くことができる反面、学生がひとり一人の実習での意義を深く掘り下げるまでいかない。様々な体験をしている意義を深める学びができないことに、もったいなさを感じることが多い。

そこで、実習指導では「居宅介護実習の気づき」について実習後の反省会に、相互に話し合って学びを深める意図的な学習方法であるラベルワークを用いることにした。グループメンバーとの話し合いを通して、ひとり一人の体験の意味を明らかにしつつ構造化し、知識の共有化を図ることを目的とした。

## 3) 実習指導「第一段階実習の振り返り」

テーマは、「第一段階実習の気づき」とした。授業の展開方法は、ラベルワーク方法を用いた個人ワークを行った。ラベル数は、1人21枚であった。具体的な展開方法

は、介護技術「身だしなみを整える」と同じ方法である。

【なぜ実習指導の授業の「第一段階実習の振り返り」にラベルワークを取り入れたか】

先回、居宅介護実習の実習後の指導では、グループワークを行い話し合いを通じて体験の意義を深めた。そこで、個人で体験を振り返り自分の学びを自分で明確化する力を養うことを目的とした。

#### 4) 介護概論「福祉情報展の反省会」

テーマは、「福祉情報展で学んだこと」・「後輩に伝えたいこと」・「各企画の反省」・「福祉情報展の準備に必要なこと」とした。授業の展開方法は、グループワーク(1G: 4~5人) 4Gで行い、ラベル数は1テーマ32枚とした。

具体的な展開方法は、介護技術「身だしなみ」と同じ方法であり、テーマ別にグループグループワークを行った。

【なぜ介護概論の授業の「福祉情報展の反省会」にラベルワークを取り入れたか】

介護概論では、福祉情報展を通して介護にも必要な「チームワーク、報告や相談や連絡の必要性・準備や計画性の必要性・リスクマネジメント力」などを養うために2003年より企画をしている。福祉情報展のねらいは、「健康や福祉の分野に関心のあ一般の人々と学生が協働して地域に貢献できる活動をする事」、「健康的な生活を目指していくための最新の情報を発信していく拠点として大学が提供する機会をつくること」である。

これまで福祉情報展が終わった後の反省会は、学生が福祉情報展のアンケート集計を行い発表しあい、当日の様子や課題や反省点などを全体の反省会を開いて行ってき

た。しかし、一年課程であるため、反省したことや経験が後輩に伝承されず、経験の蓄積がこれまで行われてこなかった。そこで、今回ラベルワークを活用したいと考えた。

## IV 結果

### 1. ラベルワークを用いた授業の結果

#### 1) 介護技術「身だしなみを整える」

学生は、ラベルワークを行うのは今回が初めてである、はじめは、これまでの授業とは異なる方法に戸惑いがちであった。1枚のラベルにも自分の考えを文章で書くことに時間がかかっていた。読み合わせの段階では、自信なさげに小さな声で自分のラベルを読み上げる学生もいた。ラベルを読み上げる毎に「そーだね、そういうこともあるね」「私の書いたラベルと同じようなことを言っているね」などメンバーは耳を傾けていた。消極的だった学生も、自分の意見をメンバーが尊重し認めることに自信が持てたのか、次第に活発になっていった。ラベルを手で動かしながら考え、全員が参加していく。似かよった意見のラベルを小皿に載せ、そのラベルが共通に言わんとしている意味を考え、看板をつける段階では、試行錯誤して悩んでいた。納得のいくまで話し合う。空間配置の段階になると、身を乗り出して集中していた。全体構造が明らかになってくると全体で何を言わんとしているのか、テーマに対する答えであるタイトルを考えた。タイトルを一生懸命考える者、黙々と作業をする者、メンバーそれぞれが幼児教育で培った得意とする創作が始まった。この段階になるとアイデアを出すこと好むか、まとめることを好むか学生に傾向が出てきた。第2週目には図解が完

成し、発表会をおこなった。図解はさらに磨きがかかり、さすが保育を学んできた事を思わせる力作であった。終了後、一様に満足げな表情で、「疲れたけど楽しかった」という感想が聞かれた。1Gの紹介をしてみると、テーマ『高齢者にとって身だしなみを整えるとは』で、学生が導き出したタイトル(答え)は「日々の生活に変化」であった。24枚のラベルから出された看板は、

- ①モチベーション：人と関ることで意見を交換し、豊かな発想が生まれて自分のモチベーションがアップする
- ②自信：おしゃれをすることで気持ちが明るくなり、何事にも前向きな考えを持つことができるから自信に繋がりやすい。
- ③外出：おしゃれをし、自信を持つことで社会参加したいという気持ちが強くなり外出する機会が増える。
- ④TPO：外出することによって、その場

にあった服装ができるようになる。行動範囲が広がるのでTPOにあわせて清潔感を考えるようになる。

- ⑤楽しみ：外出することにより、さらにおしゃれしようという気持ちになり、それが楽しみの一つになる。おしゃれを楽しむことで日常生活の活性化になる。
- ⑥安全：自分の着やすいサイズや機能を持った服装は安全にも繋がる。
- ⑦コミュニケーション：自信を持つことでさまざまな人とすきになる。さらに、人と関ることで精神面、身体面の安定感が養われる。
- ⑧生きる喜び：毎日自分と向き合うことで、自分の変化に気づき、そこで自分を美しく見せようとする意識を持つ。それが生きがいに繋がる。
- ⑨日々の生活に変化をもたらす。



写真1 ラベルワーク1『高齢者にとって身だしなみを整えるとは』

## 2) 実習指導「居宅介護実習の振り返り」

学生は実習前の感想ラベルと実習中に毎日書いたラベルから自分の思いの経緯や変化を振り返ることができた。実習後の反省をするためのグループメンバーは、実習と異なるメンバー編成にした。グループには同じメンバーがいないため、自分の書いたラベル内容が他の学生に伝わるのかと再度考える機会となった。

したがって、各学生は自分と異なる施設での体験を真剣に聞いていた。実習から時間がたち、学校に戻り学生は開放感の中で、「同じような体験をした」「そんな経験を私はしなかった」と驚いたり、感心したり体験を共有することができた。同じラベルのグループとなる小皿にまとめていく段階では、ラベルワークの手順がわかっているため、人の話を整理しながら聴いていた学生

もいた。それぞれにおける関係性の空間配置の段階になると、深く考える顔つきに変化していった。テーマに対する答えであるタイトルを考えるときは、楽しそうにしていた。図解に磨きをかける段階では以前より、豪華に創意工夫されていた。時間をかけることにも惜しまず協力して行っていた。図解が完成するにつれ、お互いに競争心が生まれ発表会に至った。図解は紙芝居風や、飛び出す絵本風のものからいろいろであった。しかし、作成に力を注ぐ傾向になり、論理的に発表するまでに至らなかった。1Gの紹介をしてみると、テーマ『居宅介護実習の気づき』に対する答えは「人との交流の大切さ」であった。22枚のラベルから出された看板は、以下のとおりである。

- ①不安：はじめてでわからないことばかりで不安…。でもどんなところか、楽しみ



写真2 ラベルワーク2『居宅介護実習の気づき』

でもある。

- ②コミュニケーション：あせろうとしゃべろうとしなくてもいい。利用者の立場になって気持ちを考えよう。一緒に考えよう。
- ③逃げないで：あきらめないで、関わり続けることが大切。利用者さんの心をゲットしよう。
- ④背景：利用者さんのことには、一つ一つに理由や背景が関係する。
- ⑤遠慮：何をするにも利用者さんは遠慮がち、上目線ではなく、頼みやすい雰囲気作りを心がける。
- ⑥目標：「なんでここにいるの?」「なんでこんなことするの?」どんな小さな目標でもそれに向かって頑張ることができる。
- ⑦レクリエーション：援助する側と介護される側の相互作用で笑顔が生まれる
- ⑧感謝：私のほうこそありがとうなのに、ありがとう。嫌なことも忘れられる。コミュニケーションの大切さ
- ⑨技術：なんとなく介助するのではない。いろんな角度（家庭環境知ることなど）から考え介助する。
- ⑩連携：リハビリテーションは20分、それを活かすのは介護福祉士

### 3) 実習指導「第一段階実習の振り返り」

今まではグループでのラベルワークであったが、今度は個人で「自分の学びをまとめる」ことになった。学生の初めの反応は、「できるかな」という反応であった。学生の様子から、ラベルの記入は実習前と実習中に記入されているので問題がなかったが、小皿にまとめる段階から、中皿にまとめてその関連性をつなげていく段階で、個人差がみられた。すらすら、できる学生は実習中から自分の実習を振り返ることができた学生で、そうでない学生は実習中のカンファレンスでも発言が少なかった学生であった。

テーマ『第一段階実習の気づき』に対する答えは「利用者のことを第一に考え、一人ひとりであった介護技術を提供することで、安心にもつながり、利用者全員が心地よい生活を送ることができるようにする。」であった。22枚のラベルから出された看板は、以下のとおりである。

- ①実習前の気持ち：不安という気持ちより楽しみのほうが大きい。
- ②まずは利用者を知る：利用者一人ひとり介護を行うためには、まずはその人の身体状況、性格、行動、言語等その人について知ることから始まる。
- ③介護者の介護技術：一人ひとりに応じた介助をすることで、その人の生活の維持や向上につながる。また、介護者も実践を通して介護技術を身につけていく。そのことは、利用者の安心・安全につながる。
- ④利用者と介護者のかかわり：利用者との信頼関係を深めることで利用者の安心感につながる。利用者のことを第一に考えて利用者の気持ちを尊重する。



写真3 ラベルワーク3『第一段階実習の気づき』

- ⑤利用者とのコミュニケーションの中での発見：まず自分から心を開き、その人をもっと知りたいという前向きな心で接することが大切
- ⑥利用者の日常生活に潤いを：利用者の日常生活を活性化することで利用者にとって暮らしやすい日々
- ⑦他職種の連携がより良い介護へ発展する：連携を図ることで利用者の変化に対応し、利用者が常に安全に快適に過ごす事ができるように配慮する。

#### 4) 介護概論

##### 「福祉情報展2008の反省・まとめ」

4回目となるラベルワークは、一人ひとりがラベルの内容をよく考えていた。また、発言は誰となくされるようになっており、どのグループも自由活発に意見交換ができるようになっていた。なかには、粘り強く考え続ける学生もおり、その学生の意見を尊重し褒め合う場面もあった。また、3回目で得られなかったグループワークの楽しさを感じているようであった。個人とグループワークを体験した後であったためか、その思考の仕方に慣れてきて、だんだん自分の意見を言える環境に安心感を得ると共に、他の意見を聞きたくくなって、喜びをもって自分たちのテーマの取り組んでいた。

今回は4つのテーマのうち、『福祉情報展で学んだ事』の結果について報告する。1Gの紹介をしてみると、学生が導き出したタイトル(答え)は「one for all, all for one」であった。「1人は、みんなのために、み





写真4 ラベルワーク4『福祉情報展で学んだ事』

んなは1人のために」という意味であった。32枚のラベルから出された看板は、以下のとおりである。

- ①責任：1人ひとりが責任を持ち、確認しあうことで成功につながる。
- ②出展：自分たちだけでなく、様々な施設や企業の協力が有るからこそ情報展につながる
- ③活動：実際活動をするときに意識して行うとよりよい活動につながる。
- ④企画改善：今回行ってみてわかったことが次の行動につながる。
- ⑤来場者：障害をもっているけど同じ人間だということ。お互いに支えあうということ。
- ⑥達成感：大変なこと、皆ががんばることで1つのものを創り上げたときの達成感は大きい。
- ⑦ひとり一人の力：全員の力になるにはひとり一人の事に努め、1人の力でも抜けると大きなものは完成しない。

- ⑧協力：全員で行う力は、準備もスムーズに行き協力しあうことの大切さをより実感した。

## 2. 創造的態度診断テスト (CBテスト)の自己評価

創造的態度診断テスト(CBテスト)を介護技術の授業前(2008年4月)と介護実習後(2009年1月)に実施した結果をみると

### (1) CBテスト事前調査(4月)

学生の創造態度を創造思考タイプと創造意欲、総合的判定としての創造パワーをみると介護技術授業前は創造思考タイプ別では創造発揮タイプ4人(25.0%)、発散思考タイプ6人(37.5%)、不得意タイプは6人(37.5%)、また創造意欲レベルを見ると創造意欲が高いものは7人(43.8%)、平均的なものは9人(56.3%)であり、介護技術授業後の総合的な創造パワーは強力型6人(37.5%)、平均型は4人(25.0%)、空転型

3人(18.8%)、弱力型が3人(18.8%)であった。

## (2) C Bテスト実習終了調査(1月)

創造思考タイプ別では、創造発揮タイプ8人(50.0%)、発散思考タイプ1人(6.3%)、収束思考タイプ2人(12.5%)、不得意タイプ5人(31.3%)であった。創造意欲レベルを見ると意欲の高いものは9人(56.3%)、平均的なものは7人(43.8%)で、総合的に創造パワーが強力型9人(56.3%)、平均型2人(12.5%)、空転型2人(12.5%)、弱力型3人(18.8%)であった。

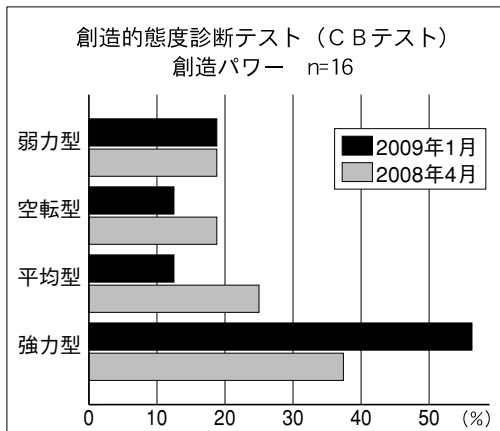


図1 創造態度診断 (C Bテスト)

図1に示すように、4月と1月における創造的態度の1年間の変化をみると創造パワー弱力型(創造思考が得意ではなく創造意欲が低い)の学生は変化がなかったが、空転型(創造意欲は高いが、創造思考が不得意で創造パワーが空回りしてしまう)、平均型(創造思考も創造意欲も平均的で創造パワーが平均的)が減少し、創造パワー強力型(創造思考と創造意欲の両方が強く、創造パワーが強い)は16人中9人であり、6人(37.4%)から9人(56.3%)に増加した。

## V 考察

### 1. 「介護技術」「実習指導」「介護概論」の演習や実習における主体的学び

#### 1) 介護技術

学生は一人4枚のラベルを書き、それぞれが「高齢者にとっての身だしなみの意義について」の意見を出した。ラベル一枚一枚を書いた時点では、身だしなみの意義の一部に過ぎなかったが、全員のラベルを合わせると「意義」がすべて網羅することができていた。これは、ディスカッションをしながら共通する意見、独自の意見を関連させながら明確にしていく作業を通して導き出された結果である。

学生は自分たちの体験から「高齢者にとっての身だしなみの意義」を身体的、心理・社会的側面から捉えることができ、さらに人としての尊厳や自立など介護の基本的要素まで引き出し、教員の期待以上結果を得ることができた。

いままでならば、一方的に身だしなみの意義について講義してきた。学生は、これまでの授業とは異なる方法に戸惑いがちであったが、終了後、一様に満足げな表情で、「疲れたけど楽しかった」という感想が聞かれている。出されたラベルや関連事項をみていくと、介護される人も自分たちも同じ人間といった視点がみられ、人権や尊厳や自立といった介護技術の基本的な考え方も自分たちで導き出していた。

介護福祉士とは、ヒューマンサービスの担い手であり、生活の主体者である「人間とは何か」を認識し思索することこそ不可欠であり、これらの教育が重要になる。

要介護者と介護の提供者双方が、ただ単に介護を提供する、介護を受けるという関

係だけではなく、人格と人格とが関わり、命と生活を共有するという相互作用により、双方の成長を促すという処に介護の価値が存在するのである。ラベルワークはこれらを導く教育方法として適切であった。

## 2) 実習指導

居宅介護実習ではグループワークを第一段階実習では個人ワークを通して、ひとり一人の体験の意味を明らかにしつつ構造化し、知識の共有化を図ることが目的であった。

グループワークでは個々の学生の発言力や表現力や語彙力が画期的に増えたわけではないのに、ラベルワークをしたことによって、活発に自由な意見をいうことができるようになった。一方、個人ワークでは、自分の学びを振り返り、実習を通して、自分が何を体験し、実習の経過の中で、どんな思いがどのように変化したのかを整理することは、体験の意味を明らかにしつつ構造化することで、自己の思考プロセスを振り返り明確化されていた。個人でラベルワークを行うことにに対し、負担に感じる学生もいたが、自分自身の問題として、客観的に自分を見つめる機会ともなっていた。

実習を終えた段階でラベルを概観すると、学生の成長したことが自他共にわかる。実習中のカンファレンスでは、発言されなかった体験や思いが共有されることができた。

学生の記入した一つひとつのラベルをみて感じたのは、学生の思考、独自の話しの組み立て方があるということであった。一つのラベルは1つの発言であるが、そのラベルは、学生の思考のごく一部であり、複雑に組み合わせさせた思考のひとかけらに過ぎないのである。

介護福祉士にとっては、生きた人間の抱える問題として捉える教育こそ求められ、生きた現実に触れることによって、その現場から考えるということの発想を体験することが不可欠である。その意味からも、実習教育は介護教育にとっての柱でもある。介護実習では、介護の受け手と直接ふれあう経験により、理論として学んだ知識や技術を実践的に学ぶことであり、また、その確かさを確認していくプロセスでもある。さらに、実習の目的のもう一つは、入所者との関わり方を通して自己の体験を客観化するプロセスが必要になる。介護福祉士の実習指導は、看護実習のように現場で直接指導することはない。したがって、実習後の指導のあり方を再考していきたい。

## 3) 介護概論

学生が、福祉情報展から学んだことは「責任、協力、意識した活動、企画改善、障害をもっている同じ人間・お互いに支えあうということ・皆ががんばることで1つのものを創り上げたときの達成感は大い。全員の力になるにはひとり一人の仕事に努め、1人の力でも抜けると大きなものは完成しない」であった。

以上のことからわかるように、福祉情報展は介護に必要な実践能力（チームワークや責任やコミュニケーション力や自主的に行動する姿勢や創造的な問題解決能力）を育成する上で役に立つことが学生自身によって明確に導き出されたのは、はじめてであった。

これから、チームケアの場で、他の専門職からチームメンバーとして信頼される力量が求められる。信頼されるためには、チームメンバーとして生活現象の変化、身体

や病状の変化などを的確に把握し、適切に伝えていくことが重要である。情報を正しく伝えるための手段としての記録や報告の仕方の習得をする良い機会となった。

## 2. CBテストの結果からみる

### 教育的働きかけ

4月と1月の創造的態度の1年間の変化が学生のCBテストの結果から創造パワー弱力型・空転型・平均型・創造パワー強力型の4つの傾向が示された。この4つの型のうち、創造パワー強力型は主体的な学習能力が育っていると考えるため、3つの型である創造パワー弱力型・空転型・平均型の学生に対しては、教員の教育的かかわりが重要である。

創造パワー弱力型の学生は、ディスカッションでは消極的で自分の考えを述べない(創造思考に対して苦手意識をもっている)で、具体的な作業については黙々と行っていた。このような学生に対しての働きかけは、具体的に体験したことを表現し言語化させて、意図的に質問をする教育的働きかけが必要である。

空転型の学生は、ディスカッションでは参加しようという意欲があり発言するが、思いつきの発言が多く、人の意見を深く聞いているの発言ではなかった。このような学生に対しての働きかけは、物事の根拠を深く考える機会を、意図的に創り考えさせるような質問などの教育的働きかけが必要である。

平均型の学生に対しては、ディスカッションでは、考えることはできるが意見を積極的に発言せず、まとめることはできていた。実習での自己評価では、自己評価がどちらかというと過小評価傾向であった。こ

のような学生に対する働きかけは、表現することへの自信をもたせるような学習環境を意図的に創り教育的働きかけが必要である。

1月の創造的態度診断では、4月の当初から比べるクラス全体の傾向としては、創造思考への興味関心や創造意欲が高まっている。

創造とは『異質な情報を組み合わせ統合し、社会や個人に新価値を生むこと』(2007高橋)であり、人にはそれぞれ固有の創造性があり、誰でも創造性を伸ばすこと可能であるといわれている。

したがって、学生をどのように捉えどのように学生の持っている能力を引き出すかは、介護教育にとっては継続して取り組んでいかなければならない課題である。

学生は、この一年間日々の生活における様々な経験や介護の教育を通して学び成長している。

ラベルワークでは1枚のラベルに書かれた情報から、発散思考、収束思考を繰り返して、体験の意味を探求していくという思考過程を経ることはできた。また、一人では考えつかない新たな発見・発想、つまり「新たな知」である新しい価値を生み出すことができた。

佐藤は実習教育におけるラベルワークを、創造的、主体的学びであり、自己の成長感をもたらす、さらに参画する主体としての成長をもたらすとその教育効果を強調している。(2004佐藤)

それに加えて今回の研究から、教員の教育的な働きかけと共に学生と教員の参画型授業を通して主体的、創造的に学ぶ楽しさは知ることができたことは確かである。

### 3. 介護教育における主体性と創造性育成

「介護の目的とは、日常生活に支障のある人の生活支援である。年齢や病気や障害に伴って生じる身体的、心理的、社会的変化と健康障害は環境をはじめ様々な要因の影響を受け、個人差が大きく、その人が培ってきた価値観や生き方、考え方は多様で個別的である。」である。その人の尊厳を守り、その時その場の状況を的確に判断し、しかもその人に合ったその人らしい生活支援を行うために介護職に求められる能力は、単なるマニュアル的な知識、技術を適用する能力ではなく、主体的で創造的な問題解決能力である。

今回、学生が自分のもっている力を主体的に学ぶ力の育成の必要性から、学習者参画型授業（1994林）に注目し、その一つの方法としてラベルワークを取り入れた。学生自身が他の人と交流し多角度で問題を探し出しあう楽しさを味わうような学習の場がラベルワークを通して得られた。

1枚のラベルからはじまり、ラベルに名前を記入したことから、学生の一人の意見が尊重されやすくなった。また、短い文章で記録され、メンバーはその人の意見にじっと眼と耳で情報を捉えることができた。ここから、情報の交流が生まれ、ラベルを通して双方向のコミュニケーションが始まった。

これまで、学生は自分の発言に対する周りの反応や雰囲気など先のことを考えて自分の思いをなかなか語りたがらなかった。しかし、ラベルワークではお互いが問い問われる中で、対話が生まれやすくなった。また自分の体験したことは、ラベルを通して、共感されて、自分一人の体験ではなく

なり共有された。

この学習方法によって、学生は他者の意見や体験にも関心が向くようになり、次第に意見が活発になった。このようなプロセスを経て、学生は語ることへの自信と傾聴の態度が育っていったと考える。また、どの授業もラベルを手や目を使って動かし、そのラベルが何を言っているのか、その言葉の意味を探求したことにより、最初は曖昧な自分の体験の意味が少しずつ明確になり、思考が深まり、新たな知識である「意味ある“場”」（2004林）が生まれた。

したがって、これまでバラバラだった配線が繋がるように、個々の体験や知識が統合され、共に考えることによって、一人では考えつくことができなかつた新たな発見や発想に繋がり、思考が広がったと考える。このような協働の作業を通して、学生同士の信頼関係が生まれ、仲間作りできチームワークにつながった。さらに、学生の学習意欲は高まり、主体的に参加できるようになった。

学生にはそれぞれ得手不得手がある。アイデアを出すことが好きなもの（発散思考）出された意見やアイデアをまとめることが好き（収束思考）、両方ともあまり得意ではないけれど、絵を描いたり、折り紙で工夫して飾るのは好きなど、互いに得意とするところを認め合い、それぞれの役割を果たすようになった。特に図解に磨きをかける段階では、このコース特有の幼児教育で培った創作意欲が触発されるのか創意工夫が見られるようになった。

図解である作品は、学生が協働して創り出した生き生きとした学びの成果であった。その成果を発表することで、学生は達成感、学びあうことの楽しさを実感してい

た。このラベルワークを通して、「介護技術」「実習指導」「介護概論」と回を重ねるごとに、学生の学習意欲は高まり、主体的に取り組み、内容も充実していった。

今回の取り組みにおいても、グループと個人のラベルワークを通して、学生は、共に学びあい、主体的、創造的に学び、自己の成長を実感することができた。これまでも、学生は学校教育の場で、繰り返し行ってきたグループワークではあるが、今回のように一人ひとりが参画した学習の場を繰り返すことで、学生の可能性を引き出すことができると考える。

#### 4. これから望まれる

##### 介護福祉士教育とこれからの課題

1987年に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、介護福祉士の登録者数は2007年3月において約63万人に達している。しかし、離職率は一般職を上回り、高齢者の増加と共に介護者不足が国民的な大きな社会問題となってきた。

この介護者不足を埋めるために、解雇された派遣労働者に介護への就職する斡旋する動きがあるが、派遣労働者は無資格者であり現場では教育していく人材や体制を整える必要がある。さらに、2009年4月からは体制加算（介護福祉士の有資格者が定数必要となる、定数無ければ減額）が導入されることから、実際の介護の現場においては、即戦力や単純労働（量）と「心身の状況に応じた介護」「援助技術を統合した判断」（質）が同時に必要とされていることを教員は認識して実習現場と協力して、要介護者の生命と生活に責任を果たすことのできる人材を輩出していくことを意識して教育に取り組む必要がある。

介護福祉士養成校はこれからが正念場を迎えてはいるが、介護福祉士の教育の意義を国民的課題と共に再認識したい。そのために、学生が主体的学習能力から生まれる創造的な問題解決能力を培うための教育のあり方と社会システムがさらに吟味されなければならない。

##### 〈引用・参考文献〉

1. 高橋 誠 著『問題解決手法の知識』p13-46, 日本経済新聞出版社, 2007年
2. 林 義樹・金城祥教 著『看護の知を紡ぐラベルワーク』精神看護出版, 2004年
3. 佐藤道子 著『看護教育における学習者参画型学習の一方法としてのラベルワークの教育効果の実証的研究』Vol.9 p23-39, 日本創造学会論文集, 2004年
4. 高橋 誠 著『創造態度・創造力・創造行動の関連性の研究』p11, 日本創造学会第25回研究大会論文集, 2003年
5. 佐藤道子 他著『創造的解決法（CPS:Creative Problem Solving）を用いた授業の試みと評価』日本創造学会第30回研究大会論文集, 2008年
6. 藤岡寛治 著『学生とともに創る臨床実習指導ワークブック』医学書院, 1996年
7. 林 義樹 著『学生参画授業論—人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法』学文社, 1994年
8. 高橋 誠 著『新編 創造力事典』p16-p19, 日科技連, 2007年
9. 岩橋成子 著『新版 介護福祉概論』建白社, 2007年
10. 黒澤貞夫 著『介護過程の展開』建白社, 2008年